

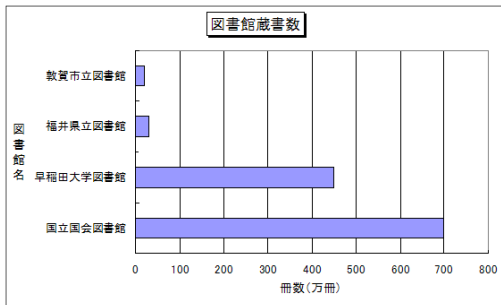
あなたの町の図書館は？

学生時代に通った図書館に、国会図書館があります。日本の図書館の中で、誰でも利用できて、日本で一番立派な図書館です。ここでは、必要とされる資料はほとんど入手可能でした。学生時代は文献調査で、本当に助かったことが懐かしく思い出されます。

あるホームページを訪ねると、「国会図書館の利用者はサラリーマンが大半で大学生など見かけない」とありますが、そんなことはありません。また、敷居が高いからだともいわれますが、今時の学生はそんなことで怯んだりしません。

学生も沢山利用していますし、国会図書館に近い人は直接、また遠くに住んでいる人で利用したい人はインターネットで利用が可能ですので、大いに活用しましょう。

ところで、国会図書館の蔵書数はどのくらいご存知ですか。国会図書館には 700 万冊の蔵書が揃っています。ちなみに早稲田大学の蔵書数は 450 万冊、筆者の住む福井県にある福井県立図書館で 30 万冊、敦賀市立図書館で 20 万冊です。



これの内、公立の図書館は、インターネットで検索、予約が可能です。最近ではこれのシステムを利用している人が多く見かけます。勿論筆者もフルに活用しています。

さて、この国会図書館の本を貸し出すカウンターの上に、次のような言葉が左側には日本語で、右側にはギリシャ語で書かれています。それは「真理がわれらを自由にする」という言葉です。

じつは、この言葉は、もともと聖書のヨハネの福音書 8 章の 31～32 節から取られた言葉です。

31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人達に言われた。「もしあなたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。

32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」。

我々は、普通そこまで考えずに、すでに出来上がっている学問や制度や機関をなんとなく利用していますが、「こういうものが作られる為に、どのような考え方がその根底にあったか」をよく考えてみる必要があるように思います。

ちなみに、大学の図書館を覗いてみると、一橋大学には「光陰如矢」、早稲田大学では「読むことによって知の何たるかを学べ」、慶応大学では「時は過ぎ行く」などと書かれています。

公立の図書館が思想的偏重を排して、出来る限り多様な立場の著書を展示しているのは、「知る権利」を通して、思想の自由や表現の自由など、国民の憲法上の自由権を保障することにあるわけです。以下では、このことが一部の公務員によってどのように政治的に利用され、歪められているかを見てみましょう。

インターネットに絶えずアクセスしている人達にはおなじみの事件かも知れませんが、少し古い話ですが、インターネットの産経新聞の記事から、「図書館は何のためにあるのか、そのあり方は？」について少し考えてみたいと思います。

一昨年の産経新聞の記事に、ちょっと気になるニュースが載っていました。千葉県船橋市の市立西図書館で起きた保守言論人といわれる人たちの著作を図書館ぐるみで大量に破棄したという事件です。

産経新聞の第1報は、新しい教科書に関する議論が高まった頃に、西部邁、渡部昇一両氏の著書 69 冊が廃棄されたというニュースです。

第2報は、新たに西尾幹二、福田和也両氏の著作も破棄され、市の教育委員の調査では書籍 187 冊中保守言論人の著作が 89 冊 (48 %) も破棄されたというのです。

その内訳は、西部氏 44 冊、渡部氏 25 冊、西尾氏 9 冊、福田氏 11 冊の計 89 冊です。

約半分とは、これはどう見ても異常であり、くだんの「産経抄」にも、これは「焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）の現代版である」とその異様で、意図的な偏向を指弾しています。

これには、さらにおまけの第3報があって、さらに小林よしのり、井沢元彦、福田恆存、藤岡信勝、司馬遼太郎などの著書も廃棄処分になったと報じています。この話、どう考えても変だと思いませんか。こうなると、明らかに保守言論人を狙い撃ちしていることが分かります。

1. それだけ沢山の図書を揃えていたということは、これらの著書に固定客がいたということで、人気の作家であったということを示しています。しかも、図書館で購入するということは、ある程度のリクエストが市民の側からあったからだと推測されます。

そうでないなら、図書館の独断で購入して、すぐに廃棄処分にしたということですから、税金の無駄遣いをやったということになります。特定の著者の著書を大量に廃棄するというのは、市立図書館としてサービスの上で、大いに問題があるはずで

2. 図書館は出来るだけ広範囲の書籍を揃えて市民の期待に副う必要があります。最近は特に価値観の多様化が進んでおり、図書館に対する市民のニーズも多岐にわたっています。

公立の図書館でありながら、特定の著者の著書を排除し、バランスを欠いた左寄りや右寄りの図書館など魅力があろうはずがありません。

3. 先人がせっかく購入した図書を大量に廃棄処分にするということは、先人の購入判断を誤りと判断したわけですから、企業であれば内部告発にあたる行為で、大きな問題です。それを見逃した図書館長はこのことをどう判断したのでしょうか。図書館長も十分承知の上で廃棄処分にしたのでしょうか。

4. 第一、「図書館は、市民の税金で運営されており、その蔵書は市民の財産である」ということを忘れてはいないでしょうか。廃棄された書籍の中には購入して5ヶ月のものも含まれるといます。図書の廃棄の理由は

- ② 汚れ、破損が著しい。
- ② 利用頻度が低い。
- ③ 内容が古い。

の三つぐらいしか考えられません。該当するであろう項目は見当たらず、5ヶ月前に購入した書籍に何が起こったのでしょうか。

我々素人の理解するところでは、通常書籍を廃棄処分する場合には、まず開架から、閉架へ移し、次いで閉架にある書籍の中から最終的に廃棄する書籍を選出するという方式がとられる筈です。それも特定の著者に偏らないよう配慮して処分する書籍を館員達で選び出すという手順のはずです。購入して5ヶ月の書籍がいきなり廃棄されたりすることなど常識ではとても考えられません。

5. 税金で買った本を廃棄処分にし、市民から読む機会を奪い、その地位を利用し、自己の考えを市民に押しつけるのは、金銭の授受よりたちが悪いイデオロギー汚職であり、職業倫理の

欠如も甚だしく、一気にかつ大量に破棄するなどが許されはがありません。図書館長の部下の管理責任はどうなっているのでしょうか。

この図書館の行為は、政治的、思想的意図はもう明らかです。このような大量図書廃棄処分は重大な思想統制の危険をはらむ事件でもあり、このように偏向した思想を持つ公務員に対し、船橋市はどう考えているのでしょうか。何時ものように、曖昧のまま、ことが終わってしまうのでしょうか。

今の外務省を見れば分かりますが、自浄作用の働かない自己完結型で、自分達のムラを繁栄させることのみを考えている役人などこの日本には不要なのです。

6. この図書館は、過去に同様のことが行われてきた可能性が非常に高いと思われます。最近の図書の管理はすべてコンピュータ化しているので調査は簡単なはずですが、図書館側は、年度が変わって、調査が出来ないと主張しているようですが、その程度の管理で誤魔化している図書館なのでしょうか。もっと過去に溯って十分調査すべきです。

図書館を通して、このような姑息な手段で市民を洗脳するなどのもっての外です。「こういうレベルの低い図書館を持つ船橋市の市民は気の毒」という他ありません。

廃棄処分された著者の西部邁氏の話では「図書館の大半には多かれ少なかれ左翼人士がいる。教科書問題のように激しい論争が起きると私の本を廃棄するというのは左翼的行動で驚くにはあたらない。この国の言論は暗黒時代に入っており、このことは予測していた。言論といえども、イデオロギー闘争からいわゆる「焚書坑儒」が起こるのは歴史の常だ。これからもさまざまな所で同様のことがいよいよ進むだろうが、本を焼いたなら、せめて理由ぐらいは明確に示してほしい」と述べています。

また、小泉内閣メールマガジンにも、安倍内閣官房副長官の談話があり、「焚書坑儒」の話の後、「この話は2千年も前の話ですが、なんと現代の日本で焚書が行われました。それも本を愛する人の集まる図書館で、特定の著者の書籍が大量に廃棄されました。船橋市西図書館のみなさん反省してください」とあります。

この図書館の暴挙は、公務員の政治的中立義務にも違反しており、憲法が保障する自由権をこれほど大胆に踏みじった以上、公の場で、自らその理由を説明し、廃棄処分にした本の再購入を速やかに計り、出費の損害を市に対して賠償すべきです。この公務員は女性の司書だそうですが、適正を欠いたこのような公務員がどのような処分を受けるのか、このまま誤魔化し続けるのか、腹立たしい気持ちでこの件に関する記事を追っているところです。

保守系の言論人の著書が冷遇されてきたのは、今に始まったことではありませんが、敗戦によって萎縮した日本のマスコミはほんの一部を除いてほとんどが、東京裁判の呪縛から脱しきれないでいます。

自虐史観懺悔の書が、現在でも図書館の書架の主流となっており、嘆かわしい光景だなあと私が住む市の図書館に行く度に暗い気持ちになります。

今後高齢化社会がどんどん進み、社会も情報が氾濫し、世の中は、凄まじいスピードで動いていきます。一般市民がその変化についていくためには、金のかからない情報源として、公立図書館の健全な今後の発展が望まれます。

そうはいうものの、暗いニュースばかりではありません。最近では、インターネット新聞が普及し、バランスの取れたありとあらゆる意見が国の内外から発信されています。とくに外国に住む日本人からのメールマガジンなどの中には素晴らしいものがあります。

長年にわたるマインド・コントロールで読者を囲い込んできた朝日新聞などは、彼らが覆い隠してきた現実が明るみに出てくるにしたがって、いま右往左往しています。

つい最近も、朝日新聞発行の週刊朝日が、北朝鮮の拉致被害者である地村保志氏から「雑談」を名目に取材して、地村氏の意向に反して記事を掲載した問題で、朝日は、同誌の鈴木編集長

と山口副編集長を停職10日に、また大森出版本部長を減給とするという社内処分を発表しています。大森出版本部長と、問題の記事の担当デスクだった山口副編集長は更迭されるとの報道です。

いよいよメディアも、こうしたすでに国民までもが巻き込まれている微妙な政治に関わる問題では、特ダネなどという名目で、報道の自由を盾に何をしても、何を言っても許される時代はついに終りに近づいた感があります。日本も少しずつ正しい方向に軌道修正がなされ始めました。

愛読者という名の朝日新聞信者も眼を覚まして姿を消しつつあります。それが証拠に、今まであまり新聞の広告を出さなかった朝日新聞がテレビや折込広告に盛んに宣伝活動をやり始め、私の自宅にまで勧誘にやってくる有様です。

自分の頭で判断せずに、愛読している新聞に判断を委ねてきたような「だらけた脳味噌」では、この激動の時代は生き残ることが出来なくなっています。将来の国の行く末に対して、大きく判断を誤るからです。

インターネットの普及のおかげで思いもかけずに、国民の意識が改革され、健全な世論の醸成が期待できるように大きく変わりつつあります。

これから何よりも大切なことは、読者がさまざまなメディア、特に対極にある報道を読み比べて、自分の頭でどちらがより妥当かを判断することにあります。

特に、

- ・ 反体制の底意が窺われるもの、
- ・ 空想主義で胡散臭さを持つもの、
- ・ 日本国民であり、日本国内で生活し、日本の恩恵を十分被っておきながら、日本をことさら貶め、悪し様に言うメディア

を理解するには複眼思考が欠かせません。

かつて、日本は「法治国家」でありながら、相手が「やくざのような手ごわい近隣諸国」に対しては「放置国家」でした。そうなった背景にはこれら日本を悪し様にいう日本のメディアの存在が大きかったわけですが、国家観や民族意識の極端に希薄だった日本も、北朝鮮の拉致問題の真実が明らかになるにつれて、久しく忘れていた国家や民族について考え始めています。

日本もこれからは、自らの足で立ち、冷静に自国の国益を追求する国に向かって努力し、子供達が将来に希望が持てる、もっともっと元気な国になったほしいと願ってやみません。

2003.01.30